

「若干の歴史問題に関する決議」の 資料的復元へ向けて：

毛沢東の講話「ポリシェヴィキ化12カ条について
(1942年)」解析

石川 禎 浩

はじめに	1
I 『毛沢東選集』所収「若干の歴史問題に関する決議」について——公表と版本の問題	3
II 「歴史決議」生成の過程（1936–1942年）	6
III 毛沢東の講話「ポリシェヴィキ化12カ条について」	10
おわりに——「ポリシェヴィキ」ディスクールのその後	19

はじめに

中国共産党において、歴史を記録し研究することは、単に過去を振り返り、いつ何がどのように起こったかを探求する作業ではない。それは通史にあてはまることであり、指導者の伝記にもあてはまることである。毛沢東は、その名も「如何に中共党史を研究するか」という報告のなかで、「もしも党の歴史を明らかにできないのなら、党が歴史の上で歩んできた道を明らかにできないなら、ものごとをよりよく行うことなどできない」とのべ、その目的をあきらかにしている⁽¹⁾。ここで言われている「ものごと(事情)」とは具体的に言えば革命運動であり、歴史や歴史研究とは、あくまでも革命運動をよりよく進めるための手段なのである。その価値は政治に奉仕することで最大となるよう期待されていることが知れよう。中国共産党（以下、適宜「中共」と略称）が結党以来、三度にわたって歴史叙述と歴史解釈を党の決議事項として定めたこと（それぞれ「若干の歴史問題に関する決議

(1945年)」、「建国以来の党の若干の歴史問題に関する決議 (1981年)」、「党の百年の奮闘による大きな成果と歴史的経験に関する決議 (2021年)」は、その最も見やすい例である⁽²⁾。

この三つの決議のうち、1945年の「若干の歴史問題に関する決議」は、歴史を決議事項として扱うという中国共産党の政党文化の先蹤としてはもちろん、いわゆる延安整風によって確立された毛沢東の絶対的権威を歴史の面から裏打ちするものとして、そして毛沢東自身の歴史観の変遷をたどる上でも、極めて重要な文献である。1981年の第二の決議が、一方で毛沢東の人民共和国建国後の誤りを指摘するものでありながら、他方で決議冒頭に「建国前28年の歴史の回顧」を置いて明確に先の決議を引き継ぎ、全面的に肯定していることから明らかなように、その歴史叙述は今なお強い規定性を持ち続けている。

かかる重要性を持つ文献だけに、決議の策定に関しては、政治プロパガンダから文献・史料学的アプローチの学術研究まで、すでに数多くの著作、論文が発表されている⁽³⁾。また、この決議は作成発議から採択まで4年ほどの歳月を要し、その間に中国共産党の活動に大きな変化、すなわち延安整風運動と呼ばれる一連の思想刷新運動が組織の上下で長期にわたって行われ、コミンテルンの解散などその間に発生した関連事案も多いため、それら関連事項との関係を慎重に解きほぐしながら俯瞰しなければ、到底その全貌と意義を視野におさめることはできない。

筆者は先に1942年10月から翌年初めにかけて延安で開催され、決議特有の党内路線闘争を基軸とする党史認識を確立する場となった「中共西北局高級幹部会議」について検討を加えたことがある⁽⁴⁾。この会議は、毛沢東ら党中央の長征を迎え入れるまで、陝西省北部や陝西・甘粛省境地帯で行われた共産党地方組織二系統の活動の歩みを検討し、「右傾問題」の解決に名を借りて1935年秋に実行された現地の肅清運動を批判したものである。具体的に言えば、かつて肅清を主導した郭洪濤、朱理治といった幹部が厳しい批判をうけて一線の活動から逐われ、他方でこの批判によって、当時辛酸をなめた指導者劉志丹、高崗らの功績が歴史をさかのぼって確認されたのであった。いわば、のちの歴史決議でメインの主張となる正邪の路線闘争（モスクワにばかり目の向く教条主義者と在地に根付いた活動をする実践者）の図式が、この「西北局高級幹部会議」（以下、「西北局高幹会」と略称）での議論で確立されたのである。

今回、本稿で紹介し、検討を加えるのは、この「西北局高幹会」に並々ならぬ熱意で出席した毛沢東が会で行った講話「ボリシェヴィキ化12カ条について」である。当時すでに歴史決議のような明確な文書で、過去の党中央の誤りを明確に指摘したいと考えた毛は、スターリンが1925年にドイツ共産党員に与えた指示書簡の末尾にある12カ条の指摘をか

み砕くように解説し、劉志丹や高崗の正しさが、中国社会に根ざした活動を行った点にあっただけでなく、かれらの思想がレーニン、スターリンらのボリシェヴィキの正しさにも合致していたことを高く評価した。レーニンやスターリンを強く支持すること、すなわち「ボリシェヴィキ」思想を奉じる毛沢東がそこにはいる。やがてモスクワかぶれを強く批判することになる毛沢東ではあるが、延安整風の時期、すなわち歴史決議の構想を練っていた時期のかれの言葉は、あきらかにボリシェヴィキとしてのものだった。

「ボリシェヴィキ」という言葉がコミンテルンなどロシア型共産主義へのある種の帰依を意味するものだとすれば、毛のそれはどのような変遷をたどったのか。西北局高幹会でなされた「ボリシェヴィキ化12カ条について」の講話は、それに真正面から答えるものであると同時に、それが1945年の「若干の歴史問題に関する決議」に至って、どう変化していくのかを探る上でも重要な文書である。その意味では本稿は、「若干の歴史問題に関する決議」に至るまでの時期の毛沢東の思想の歩みをあきらかにし、同決議のオリジナルな姿を復元せんという試みでもある。

I 『毛沢東選集』所収「若干の歴史問題に関する決議」について——公表と版本の問題

1945年の「若干の歴史問題に関する決議」（以下、適宜「最初の歴史決議」、あるいは単に「歴史決議」と略称）は、いわゆる延安整風運動の総決算としても、毛沢東の歴史認識の足取りを知る上でも重要でありながら、他方でまた極めて特異な文献でもある。その特異さの第一は、それが党の公的な決議でありながら、同時に毛沢東個人の著作の扱いを受けているという点に由来する。

通常、党が時々採択してきた決議文などの正規文書は、その起草や発議に特定の指導者が関わっていたとしても、通常個人の著作とは見なされない。歴史文書になって、資料集に収められても、出典はおおむね「〇〇大会決議集」や「文書館資料 文書番号〇〇」と記されるのが通例で、『◇◇著作集』第◇巻というような指導者個人の著作集を出典とすることはまずあり得ない。ところが、中国共産党の場合は、歴史文献としての決議文などが、まず毛沢東の著作集、すなわち『毛沢東選集』（以下、適宜『毛選』と略称）に収められ、半ば指導者個人の著作と見なされることがある。すなわち、党の関連文献で、特に『毛選』にすでに収録されている場合には、それが毛の審定を経た最も権威あるテキストだという理由から、『毛選』版に依拠することになっている⁽⁵⁾。「歴史決議」も例外ではない。「歴史決議」を収録する中共の公的な歴史文書資料集のどれを見ても、その出典は1953年に刊行

された『毛沢東選集』第3巻になっているのである。中央档案馆なりの保管する原文書に由来する決議文テキストは、一度も公表されていない。

実は、「歴史決議」は1945年4月の中共6期7中全会での原則採択を経て、同年8月の7期1中全会において全会一致で採択（8月9日）されたさい、8月12日付けでいったん印刷されている⁽⁶⁾。ただし当時は、党内文件の指定を受けたため、公表されなかった。「歴史決議」が初めて公表されたのは、1953年に『毛沢東選集』第3巻に「学習和時局」の付録として収録されたさいのことである。1945年時点のテキストと『毛選』版のテキストが同じならさして問題はないのだが、『毛選』版のテキストは、1950年代初めの『毛選』収録に合わせて、毛自身によって相当に手を加えられたものだった。ただし、『毛沢東選集』第3巻所収のその「決議」を見ても、採択の経緯は簡単に書いてあるものの、決議文のテキストが1945年のものとどう違っているかは全く記されていないし、そもそも毛によって修正が施されていること自体、何らの言及もない。

『毛選』所収の多くの文章が、毛によって選集刊行にあわせて修正されていることは、斯学の世界においては常識と言ってよいが、「歴史決議」のように、一度党が公式に確定した決議文がかれの個人著作であるかのように収録され、さらにそのさい修正が施されているものはこれ以外にはない。さらに言えば、附録とは言え、「決議」には注釈がつくなど、文章についての扱いも他の毛の著作と何ら変わらない。党の決議にして毛の作品、その破格はこの一事を以て知るべしである。

1950年代初期に行われた『毛選』の編集作業については、近年いくつかの資料集などが刊行されているものの、歴史決議の収録経緯、あるいはそのさいの修正の中身や手順をうかがわせる資料は、極めて少ない。そうした中、「歴史決議」の作成にもその改訂にも与った胡喬木が、関連情報を若干ではあるが残している⁽⁷⁾。それによれば、「歴史決議」の公表に関して、毛は1950年8月19日付けで中央政治局に宛てて、みずからの選集に決議を収録すること、合わせて収録にさいして、「陳秦二同志」（陳紹禹、秦邦憲）の名前を明示するなど若干の修正をする必要があると書面で伝え、回覧審議で全政治局員の同意を得たという。注意すべきは、この時点では修正内容のごく一部が示されただけで、詳細については事実上、毛への白紙委任とされたいことである。一度中央委員会総会で正式に採択された決議の文言に対して、事前にひとこと形式的に断りを入れれば、毛は自らの判断で修正を加える権限を持っていたことになる。その意味では、「決議」が選集という毛個人の文集に収められているのは、理由のないことではないのだ。

胡喬木によれば、毛の行った修正は、おおよそ以下の三方面に集約できる。第1は「毛沢東思想」、あるいは「毛沢東思想体系」という語を一律に削除したことである。削除した

部分はそのままとされることもあれば、別の言葉（例えば、「マルクス・レーニン主義の路線」）を補った場合もある。「毛沢東思想」を削除することは、毛自身によってそれ以前から試みられていたらしいが、これは毛沢東「思想」の響きがマルクス・レーニンらと同等のランクの思想だと印象を与えることを忌避したものだ。もっとも、「毛沢東思想」の語は「歴史決議」のキーワードであったから、この語を使わぬことは決議の魂ともいうべきキーワードを自ら葬ることに等しい。それを受け入れた要因はひとえに「毛沢東思想」の語に反発し、それを受け入れようとしないうソ連への配慮であった。当時のソ連、ひいてはスターリンの威光の大きさは、同様にこの修正で、文中に「スターリン同志」の語、並びにかれの文章からの引用が意図的に追記されていることにも表れている。

第2の修正点は土地革命戦争時期の左傾の誤りを述べるさいに、責任の所在を具体的に示すため、個人名（陳紹禹 [王明]、秦邦憲 [博古]）を明示したことである。胡喬木によれば、かれらより前に中共の指導的地位にいた陳独秀や瞿秋白、李立三らがすでに実名で批判されている以上、陳、秦の名をあげるのに不都合はないとされたという。さらにいえば、秦はこの時すでに鬼籍に入っており、王明は王明で『毛選』第3巻の刊行を前に、病氣療養を理由に訪ソ、事実上亡命していた。配慮する必要は何もなかったと言えよう。このほか、テクニカルなことでありながら、忘れてならないのは、批判対象となる路線の誤りの場合、左の偏向のみ「左」傾と括弧付きで表記されるようになったことである。この表記原則は、この決議のみならず、その後の党関連の文献に適用されていくことになる。

そして第3、一見些細なことでありながら、この決議文の色合いを微妙に変えているのは、いわゆる10年内戦時期に常用された共産党独特の用字を、延安時期～建国時期の用字に替えていることである。胡喬木は、「ソヴィエト運動」が「紅軍運動」に、「蘇区（蘇維埃区）」が「根拠地」に、「暴動」が「起義」に、それぞれ改められたと伝えている。こうした修正は革命運動の中身ややり方をソ連からの受け売りであった呼び名から中国語らしい、あるいはより洗練された用字に改めたものだということができる。国民政府の権力の及ばない地方に独自の労農政権を立てて割拠していくこと、そうした運動は「蘇維埃革命」と呼ばれたが、人名とも何ともつかない「蘇維埃」なるものが一体何なのかは、確かに多くの農民たちには理解不能だったため、共産党の特殊タームであるソヴィエトやその略称「蘇」をより一般的な語彙に替えたのだろう。ただし、こうしたロシアやソ連をある種の手本・モデルと見なす心性によって支えられたタームを別の言葉で置き換えたことにより、本来の決議が持っていたそうした心性の痕跡が消されてしまった憾みは残る。他方で、修正の方向性から言えば、「毛沢東思想」を削除し、スターリンの金言の引用を加筆するのは反対の方向の修正とも言えるわけで、いわば片方でソ連色を足しつつも、ボリシェヴィ

キ色を薄めたということになるうか。

胡喬木の回想は、このように修正の方向性や内容について確かに述べてはいるが、所詮1945年時点の決議自体を見るのがかなわぬ以上、それがすべてかどうかは、確認のしようがない。『毛選』版以前の「歴史決議」諸版（11種）を集めて版本研究を行った周兵氏による挑戦的研究⁽⁸⁾によれば、大は重要タームの削除や追加から、小はそれこそ句読点や助字の変更まで、選集収録に当たって、つまり公表にあたって「決議」に加えられた修正箇所は、決議全体で800カ所を超えるとされる⁽⁹⁾。『毛選』収録の歴史決議の分量が2.7万字ほどであることを考えると、かなりの修正と言ってよい。手続きの面でみれば、他の中共中央政治局員から白紙委任をとっただけのことはあったとすることができるし、繰り返しになるが、党の正規文書というよりも、むしろ毛沢東の「作品」だというもの、あながち言いすぎではない。

さらに言えば、1945年8月に党内文件として印刷された内部発行版に先だつ同年4月の決議文、そしてそもそもの歴史決議の原案にあたる「四中全会以来中央領導路線問題結論草案」(毛起草の草案で16の問題群を立てて論じたもの、約2万字)に至っては、その周兵氏を含む中国の研究者もテキストを把握できておらず、胡喬木の回想から断片的な情報が得られるのみである。そこで次章では、決議作成前に時計をもどして、決議作成に至る一連の過程を毛の指導権の掌握と関連付けながら再構成してみよう。

II 「歴史決議」生成の過程（1936–1942年）

長征途上の中共が1935年1月に開催した遵義会議は、よく知られているように、党中央の従来の軍事路線を批判し、毛沢東が組織面、政治面で党内の指導権を確立する上で、大きなステップとなった。ただし、会議の後も毛の指導的権威は、なおかなり限られたものであって、党運営の面では、張聞天らとの協調を余儀なくされただけでなく、組織面においては、なお張聞天の下風に立たざるを得なかったという事実には、注意が必要である⁽¹⁰⁾。当然に、遵義会議以前の党中央の政治路線にたいして、ただちに再検討がなされるということなど、起こるべくもなかった。それゆえに、毛は長征を終えた後の1936年9月に、過去の誤った路線問題を再検討する必要があると提起した際に、「遵義会議は博古のそのほかの誤りを是正ただけで、そのセクト主義や冒険主義といった問題が路線上の誤りだということ指摘しなかった。それは不十分だったのである」⁽¹¹⁾と述べたのであった。

こうした認識、すなわち遵義会議は不十分であったという毛の認識は、その後、かれの党内での指導的地位が上昇するのに伴って、さらに確固たる信念へと変わっていき、いず

れしかるべき場で、遵義会議を含め、歴史総括の問題にあらためて決着をつけたいという考えを持つに至ったようである。実際、1937-1938年あたりには、来たるべき党の全国代表大会（第7回大会）では、決議といった形式で党の歴史問題に明確な裁定を下すべきだという具体的な意向が、毛沢東をはじめとして、党内にあったと見られる。それを裏付けるのは、中共の代表として任弼時がモスクワのコミンテルン執行委員会でおこなった報告（1938年5月）⁽¹²⁾ と、その報告への回答として、王稼祥が1938年秋にモスクワから持ち帰ってきたコミンテルンの指示である。指示は「中共の第7回大会は実質的な問題に重点を置くべきであり、過去十年の〔国共〕内戦の問題を討議するのに多大な時間を費やすべきではない。十年の経験を総括することについて、インターは特に慎重であるべきだと考えている」⁽¹³⁾ と述べていた。

つまり、この指示の文面から、中共が1938年時点でコミンテルンに打診した来たるべき党大会の議題に、「過去十年の内戦の問題を議論する」こと、すなわち1928年の党第6回大会以来の党の路線問題の歴史的総括が含まれていたこと、そして国共合作の継続による抗日戦争の遂行を何より願うコミンテルンは、それに難色を示していたことが知れるわけである。コミンテルンにしてみれば、中共党内の紛糾、対立を惹起しかねない歴史問題の総括をこの時期に急いでやる必要性は全く見いだせなかったであろう。

こうしたコミンテルンの懸念を待つまでもなく、1940年以前にあっては、中共党内にも、過去の路線問題を全面的に総括するための条件は整っていなかった。例えば、この歴史問題の解決に一貫して強い意欲を見せていた毛沢東は、1940年12月の政治局の会議の席上、「遵義会議の決議は軍事面での誤りをいうだけで、路線の誤りだったということを書いていなかった。だが、実際には路線の誤りだったのだ。したがって、遵義会議の決議にはいくらか修正を加えなければならない」⁽¹⁴⁾ と述べ、さらにはいわゆる「ソヴィエト後期」の左傾政策全体にたいしても批判を加え、それが事実上「路線の誤り」であったと強く主張したものの、居並ぶ他の指導者たちは必ずしもそれに同意せず、特に路線の誤りと認定することには極めて消極的だった。毛と並ぶ指導者であった張聞天は、「ソヴィエト後期において、左の誤りを犯しはしたが、当時はそれでも苦しい闘争を行っていたのであり、マルクス・レーニン主義のために戦っていたのだ。路線には決して誤りはなかった」と反論している⁽¹⁵⁾。

共産党におけるいわゆる「誤り」なるものには、様々なレベルがあるが、「路線」の誤りのレベルは最高のものであり、かつての「李立三路線」への糾弾・処分厳しさにも見てとれるように、「路線」の誤りを犯したと認定されることは、その過る「路線」の指導者にとっては、指導者失格の烙印を押されることと同義であった。「ソヴィエト後期」の党中

央の一翼を担った張聞天が誤りのレベルを「路線」のそれと認定することに抵抗したのは、当然だったのであろう。張聞天のような認識を持つ指導者が政治局で重きをなしている以上、歴史の清算をめぐって政治局内で議論を重ねたとしても、それが果てしない水掛け論に終わることは明白であった。

こうした事態を打開するための有力な手がかりになったのが、いわゆる「党書」、すなわち『六大以来』『六大以前』、および『兩条路線』といった党文献資料集の編纂・刊行である。毛を助け、これら党文献資料集の編纂に深く関与した胡喬木によれば、『六大以来』のための資料収集は1940年後半に始まったが、当初は中共7大開催に向けた準備作業の一つであった⁽¹⁶⁾。ところが、しばらくして毛沢東は党内の一部指導者に過去の路線の誤りについての認識が欠如していることに鑑み、中共6大以来の歴史文献を提示することによって党幹部の認識を是正することを考えたのだという。かくて、1941年8月から9月にかけての中共政治局会議において、6大以来の歴史文献を冊子にまとめて高級幹部の党史学習に供することが提起されたのだ⁽¹⁷⁾。中共の歴史上、初めて正式に編纂・刊行されたこれらの資料集、特に毛沢東が自ら編纂に加わった『六大以来』は、後世の中共党史研究者にとっては極めて重要な歴史資料であるが、当時はそれ以上の高度な政治的役割、すなわち全党規模で展開される整風運動（歴史認識の統一はその大きな眼目のひとつ）徹底実施のための教材となることを期待されたのである。毛沢東の権威確立を文書の面で保証した1945年の「歴史決議」の形成が、それに先行する『六大以来』の編纂・刊行に負うところ大であるとは一部の史家の指摘するところだが、まさに『六大以来』は、文献資料集以上のものであった⁽¹⁸⁾。

『六大以来』が延安整風運動において果たした役割の大きさについては、毛沢東自身もかつていささか得意げにこう語っている。1941年6月に「党書を編纂したが、それが出るや、多くの同志が武装解除されて、1941年の9月会議〔1941年9月に開催された中共中央政治局拡大会議〕が開けるようになり、そこでようやくみな内戦後期の党中央の指導の誤りは路線の誤りだということを認めたのである」⁽¹⁹⁾。ここで注意すべきは、その「武装解除された」同志に、のちに中共西北局高級幹部会議の指導に当たることになる任弼時も含まれていたことである⁽²⁰⁾。周知のように、任弼時は1931年のいわゆる6期4中全会で中央政治局委員に補任された党幹部であり、「ソヴィエト後期」のいわゆる「左傾中央」の指導者の一人であった。1940年3月にモスクワから延安にもどって後、任は中央書記處、中央辦公庁の活動に加わり、党の優秀なる「管家人」として、次第に毛沢東の信任を得ることになる。『任弼時伝』の伝えるところによれば、1940年代前半の延安には毛沢東専用の無線機が一台あったが、コミンテルンからの機密電報や至急電報などは、すべて任弼時がみず

から翻訳し、また毛沢東からの電報もそのロシア語訳を任弼時が校訂・チェックしたのちに発出され、ほかの者には関与させなかったという⁽²¹⁾。もって、任に対する毛の信任のほどがうかがえよう。そうした信任は『六大以来』などの刊行によって任が「武装解除」された、つまりは牙を抜かれたことと引きかえに与えられたわけである。

実際に1941年の九月会議において、任弼時は「ソヴィエト後期」のいわゆる「左傾の誤り」について、「当時、毛主席は教条主義、つまり本本主義に反対しておられた。我々が当時いわゆる「狭隘な経験主義」に反対したのは誤りだった」と発言していた。「狭隘な経験主義」とは、かつて毛沢東に貼られていたレッテルにほかならない。すなわち、任弼時はそのようなレッテル貼りによって毛沢東を批判したのは誤りだったと自己批判したのである⁽²²⁾。このようにして任弼時らの屈服を引き出したのであるから、毛は自らの推し進める歴史問題の検討に、間違いなく自信を深め、そしてまた任弼時に対する信頼を増したことであろう。

九月会議ののち、理論面で過去の歴史問題を清算すべく、毛沢東は九一八事変より遵義会議に至る時期の党中央の「左傾」を示す典型的文献9篇にたいし、「辛辣で容赦なく、時に嫌みさえ混じる」筈記を執筆している。すなわち、胡喬木によって毛の長年の鬱屈がぶちまけられた「激憤之作」と評される「第三次「左」傾路線の九篇の文章を駁す」がそれである⁽²³⁾。後年の「歴史決議」の最初期の構想を示すこの筈記の全文は——恐らくはその筆致のあまりの直裁さゆえに——今日に至るも発表されておらず、5万字以上に達するその内容は、それを引用するいくつかの著作から窺うほかない⁽²⁴⁾。当時、毛沢東はかかる辛辣な筈記を任弼時のみ（のちに外地から延安にもどった劉少奇にも）には閲読させたと言われており⁽²⁵⁾、ここからも任に対する毛の信任が明らかとなる。毛沢東の目には、任弼時の歴史問題についての認識変化が、かなり満足 of いくものと映ったに違いない。

かくて、1941年の九月会議の激しい議論と一部指導者の自己批判を経て、中共中央の指導者レベルでは、「ソヴィエト後期」の「左」傾路線の誤りについて、基本的な認識の一致が見られたわけだが、当然に事は中央の議論のレベルで決着するものではない。次なる課題は、この認識を如何にして全党に拡大、普及していくか、そしてこの認識を如何なる具体的な歴史事例にあてはめ、その正しさを検証していくかに移ることになる。その具体的な事例こそが、「西北歴史論争問題」であり、その検証をする場が西北局高幹会だった。次章では具体的に毛の「ボリシェヴィキ化12カ条について」を解説するが、その講話が行われた背景として、講話にも登場してくる「西北歴史論争問題」については、やはり最低限の説明を先にしておくべきだろう。

今日、中国共産党史のオーソドックスな著作に見える「西北歴史論争問題」の説明は、

以下のようなものであろう。

1930年代、劉志丹らの共産党員たちは陝甘地区で革命運動を興し、武装闘争の末に革命根拠地を切り開いた。しかしながら、王明の左傾教条主義路線の影響を受けた中共中央の代表朱理治は1935年7月に陝北に派遣されてくるや、郭洪濤ら一部の現地党員の偏見に惑わされて左傾の誤った路線を執行、正しい路線を実行していた劉志丹、高崗、習仲勲ら現地党員に「右派」、さらには「反革命」のレッテルを貼り、激しい迫害を加え、多くの革命人士を死に追いやった。幸いにして、事態が決定的に悪化する前に毛沢東ら党中央の長征が陝北の根拠地に入って肅清運動を停止させ、劉らを釈放したため、当時国内に残されていた唯一の根拠地は生き残り、その後の党の起死回生の土台を作ることができた。ただし、この時点では劉志丹らに貼られた「右派」をはじめとするレッテルは撤回されず、かれらは不当な人事処遇を受けることを余儀なくされたが、1942年10月から翌年1月にかけて開催された西北局高幹会での審議と処分撤回の決定により、劉志丹（1936年戦死）や高崗らの汚名が晴らされ、朱理治、郭洪濤らへの処分が行われるという評価の大転換がなされた、と。

実際の事態はおおむねそのように展開したのだが、注意すべきは、劉志丹、高崗らへの肅清にいたった誤った闘争の根源が当時の王明ら「左傾教条主義」からの影響だという点の解釈は、西北局高幹会より後になって定式化された説明であって、当時、つまり毛が「ボリシェヴィキ化12カ条について」の講話をした際には、王明云々は言及されていなかったということである。むしろ、毛沢東の認識では西北で起こったことの根源には、王明らの党中央の誤った路線があったのだという確信があったかも知れないが、それはこの段階で公言すべきことがらではなかった。王明の名がハッキリと示されるのは、先にも述べた通り、歴史決議が『毛選』に収録された1953年のことである。ただし、この講話を聴いた者は、毛の批判の矛先は単に朱や郭といった地方幹部の不始末ではなく、より大きな的に向けられていることに薄々気づいていたことだろう。それを多くの党員の前でほめかすこと、それが毛の講話の重要な意義だったからである。

Ⅲ 毛沢東の講話「ボリシェヴィキ化12カ条について」

毛がその特色ある講話「ボリシェヴィキ化12カ条について」を行ったのは、西北局高幹会における上記の歴史論争問題の審議をうけ、劉志丹、高崗らの正しさを歴史をさかのぼって認定する報告（高崗の「辺区党的歴史問題検討」1942年11月17-18日）が出されたすぐあとのことだった。

11月21日、23日の二日間にわたって行われたこの講話（以下、「12カ条」講話」と略称する）は、広く世界の共産党のボリシェヴィキ化を進めるためには如何なる心構えが必要かという問題について、1925年にスターリンが提起した12カ条の項目⁽²⁶⁾をとりあげ、毛が中国の実情に引きつけながら一条一条詳しく解説していったものである。その会議における位置づけとしては、高崗の歴史問題への裁定公表を受け、それにお墨付きを与え、さらにその陝北の事例を素材に、スターリン流のボリシェヴィキ精神を平易な言葉で幹部党員に注入しようとしたものだと言ってよいだろう。こう書くと理屈っぽく、説教がましい講話に聞こえるかも知れないが、何度か毛の講話を聴いた経験があり、その回の講話にも立ち会ったある知識人党員は、つぎのような感想を残している。

これはわたしの聞いた毛沢東の講話の中でも最も長いものだった。……その時にかれは全部合わせて半日単位で三、四日にわたり話した。毎日が優に四時間以上、全部で十三、四時間もお話しになった。12カ条を一条一条話していくわけだが、スターリンのそれぞれの条の深意について詳しく解説し、かつ実際の情況と結びつけて縦横に広がっていくその話しぶりたるや、実に生き生きとしていて、すっかり虜になってしまった。⁽²⁷⁾

真のボリシェヴィキになるためにスターリンの掲げた12カ条の項目について、毛が逐条丁寧に説明し、長い講話にもかかわらず、かれの話は聴衆を飽きさせなかったという。実際、毛の講話記録にはあちらこちらに「笑声」「大笑」といった反応が記されており、それが一方的説教ではなく、ユーモアを交えたものであることを伝えてくれる。聴衆の心をつかむことに長けた講演上手と言う意味で、毛らしい講演であることは間違いない。

他方で、この講話は、毛が整風運動において党員にどのような実践を期待したのかを知る上でも、また歴史についての毛の認識とかれが強力に推し進めた延安整風の理論的滋養がどこから来たのか知る上でも、豊富な事例を提示してくれるものである。整風時期の毛沢東の芸術、文学といった領域にたいする主張として「文芸講話」（1942年）があるとするれば、いわば党員に党員たるべき者の心構えをわかりやすく説いたものが、この「12カ条」講話だと言ってよいだろう。その意味では、胡喬木が延安整風運動期の毛の思想的発展を示す重要な講話であると高く評価するのも当然である⁽²⁸⁾。

ただし、二日間にわたってなされ、約5万字の上る長大な講話であり、さらに「歴史決議」の背景を物語る内容であるにもかかわらず、毛のこの講話は、今日そのごく一部が毛沢東の文集、年譜に収録されているだけで、全文は公表されていない。篇幅のわりに知ら

れていない理由は、後述する政治的考慮という要因のほか、技術的なものとしては、毛が講話で具体的な事例として引いている西北地域での出来事が、当時のかれらにとって身近な例ではあったものの、後世から見るとローカルな次元の事象が多く含まれ、当時の西北地域の党活動を取りまくことがらについてのかなり詳しい背景説明がなければ、その脈絡をつかむことが難しいためであろう。

以下、筆者が諸版本を整理して作成したこの講話記録⁽²⁹⁾によりながら、講話の特徴を整理してみる。

1 毛を講師とする生き生きとした党史講座

「12カ条」講話は、その形式や題目を見れば、確かに西北局高幹会全体に対して濃厚な理論的色彩を与えるものではあったが、そこで語られた具体的な内容について言えば、毛沢東直々の解説による党史講座でもあった。毛が自ら経験してきた党史上の様々なできごと、すなわち五四運動や建党活動に始まって、国共合作、ソヴィエト革命運動、さらに抗日戦争にいたる時期のいろいろな事象が縦横に論じられている。講話に登場する党史上の著名な人物としては、李大釗、陳独秀、彭湃、李立三、張国燾、項英らがおり、他方で延安整風運動において厳しい批判・迫害を受けた知識人も、王実味を筆頭に、呉奚如、成全、王里、潘芳、宗錚らが「反党集団」「叛徒」と名指しされる形で登場する。このうち、李大釗や彭湃にかんする生き生きとした紹介からは、かれらに対する毛の評価や眼差しを見てとることができる。

例えば、ポリシェヴィキ化の第6条（最高の原則性と民衆との最も広範な連携、接触をむすび付けること）に言及した時、毛は「農民運動の大王」と呼ばれた彭湃を例にして、迷信を打破するという最高の原則性と民衆の信頼を勝ち取るという連携とを両立させたその臨機応変の活動を高く評価して、次のように述べている。

迷信の打破、婚姻の自由、民主集中制などの最高原則を忘れてはならない。……それを忘れてしまったら、共産党員ではなくなってしまう。ただし、もう一つ、民衆の求めに応じていかねばならない。……彭湃同志は、海陸豊では自分も菩薩参りに行っていた。彭湃同志は大学出で、留学生で、自身が地主でもありながら、全国の農民運動の大王にして、共産党員でもあって、おまけに中央委員だった。かれのやり方はこうだった。自分でも観音菩薩参りをするのさ。民衆たちは二月十九日には観音菩薩参りに行くことになっていて、一緒に行くと言えばよい人だと言ってくれるが、行かないとなると、この人はあまりよい人じゃない、なんで観音菩薩を信じないのさ、あん

たはひねくれ者だということになる。だったら、菩薩を信じてもいいじゃないか。「じゃ、ちょっと信じてみるか」と言ってみるのさ。するとその人が大学出でも留学帰りでも、向こうさんは菩薩を信じるのを見れば、あんたは良い同志だねえと言ってくれるし、民衆たちはあんたを見かけると、ちょっと座って行きなよとか、お茶でも飲んでいけとか言ってくれるようになる。これこそが民衆と結びつくということなのさ。

それから民衆と同じ身なりをしければいけない。民衆と打って一丸となるわけだ。こんな高いナポレオンのような帽子に、革靴履き、ステッキなんか持ったら、絶対ダメだ。農民と同じ服を着なきゃ。民衆と打って一丸となるというのは、遅れているかれらに寄り添い、かれらに近づき、かれらと結びつき、かれらの声に耳を傾けるということなんだ。こうすればかれらを教育することができるようになるし、かれらに学ぶこともできる。つまり、かれらの切実な要求を理解できるようになるのさ。それがわかったところで徐々にやっていく。土豪と戦い、土地を分けていけば、菩薩は自然と減っていくのさ。

彭湃に見えるこのような臨機応変のやり方こそ、毛沢東が堅持し続けたものであった。いわば、最も毛沢東らしさを感じさせるこのようなフレーズを含む講話記録が、その後出版されずに終わってしまうのだから、考えれば惜しい話である。「最高の原則性と民衆との最も広範な連携、接触をむすび付ける」、毛のほか、いったい誰がこんなに難しい理屈をかくも平明に説明できただろう。

一方、こうした模範的な人物にたいして、それと反対の人物に向けられる厳しい批判の眼差しは、これまた徹底的に辛辣である。とりわけ、反党勢力とその一味にたいするや、毛の言葉遣いは途端に険しいものとなる。例えば、毛は「王実味は確実にトロツキストだ」、あるいは「呉奚は間違いなくスパイだ」と何らの躊躇もなく断言する。党中央の命令に異を唱え、対抗しようとした張国燾、項英らの人物も、同様に「陳橋の兵変」「黄袍を身にまとう」といった中国史の故事になぞらえ、厳しい言葉遣いで叱責されている。

とりわけ、この講話の前に西北局高幹会の議論で、陝北革命運動における左傾路線の主犯とされた朱理治と郭洪濤の二人は、講話でも非難的となった。「12カ条」講話には、朱や郭が「陝北の肅清」で犯した誤りについての名指し批判が、三十カ所近くもあるのみならず、きつい調子であからさまにあげつらう箇所すらみられる。例えば、毛は朱や郭が推し進めた冒険主義的行動方針をこのようにこき下ろしている。

それから〔朱や郭らが言ったことに〕「洛川を中心として三辺へ発展していく」とい

うものもあるが、これも〔無謀さ加減は〕どっこいどっこいだ。(笑声) 三千人を洛川から鄜縣〔今の富縣〕までの30キロに並べていくというのが、頭数が全然足りないだろう。三千人を並べるとどのくらいの長さになるか、一人分でこれくらいだろう、〔体格のよい〕太っちょでもせいぜいこのくらい(笑声)、ガキだって混じっているんだ。⁽³⁰⁾

この引用に見える「笑声」は、毛のユーモラスな説明が聴衆の笑いを誘ったことを表す。同様に、「正しい路線」の実行者としてこの講演会の場にいた高岡のことを紹介する時には、「民衆はどういったわけでかれらを認めたのか？ 高岡さん？ あばたの高？ そうそうその御仁だ(大笑)」と言ったあんばいで、講話記録からうかがわれる会場は、さながら毛の独演会である。壇上の毛沢東はどんどんと調子に乗り、聴衆と一緒にあって、ある種の集団悪乗り劇に興じる中、高岡らはまだしも、満座の中で笑いものにされた朱理治、郭洪濤二人の屈辱たるや、如何ばかりであっただろう。実際、かれら二人はこの会議で、「一部の小集団の輩、野心家」というレッテルを貼られ、それを受けて毛は、「朱理治は果たして叛徒か否か？ 目下調査中だが、調査で叛徒だとなれば、日和見主義というフリをして、実質は叛徒をしていたということになる」⁽³¹⁾とまで断言していた。

2 スターリンを手本とするポリシェヴィキ・ディスクール

毛沢東の「12カ条」講話の最大のねらいは——スターリンの著作を解説する目的で講演しているのだから、当たり前ではあるが——スターリン流のポリシェヴィキ行動様式を高く評価し、それによって全黨員を染め上げ、党を「ポリシェヴィキ」の政党へと鍛えていくことにあった。この「12カ条」は、基本的には1925年の「ドイツ共産党の前途とポリシェヴィキ化について」に出てくるスターリンの訓話を念頭においていたものではあったが、そのスターリン論文と並んで毛の講話の骨子となったのは、スターリンのもう一つの經典的著作であった。すなわち、1938年に出版されるや、たちまち全世界の左翼陣営を風靡した『全連邦共産党（ボ）歴史小教程』（露語：Краткий курс истории ВКП(б)、中国語：『聯共（布）党史簡明教程』、以下『小教程』と略称する）、特にその結語部分である。「マルクス・レーニン主義の基礎知識の百科全書」とも呼ばれたこのソ連共産党の歴史にかんする教本こそは、延安整風時期の中国共産党の、そして毛沢東の「バイブル」といってよい書物であり、その影響は中国においては毛の死まで続いた⁽³²⁾。

スターリンのポリシェヴィキ型革命モデルと言え、一般には毛沢東の革命方針とは見なされず、むしろ毛沢東のそれとは異質な、教条主義的リゴリズムとされることが多い。それゆえに、それに反対することで党内に権威を確立した毛の思想を「ポリシェヴィズム」

と結びつけて解釈することは、従来慎重に避けられてきたおもむきさえある。こうした概念の意図的操作によって、延安整風運動はモスクワ、あるいはコミンテルンが発する悪しき教条主義的気風から脱するために、その排斥を受け続けた毛沢東がそうした教条に代わって中国の現実に根ざした革命方針を求め、それを実現するために起こしたものであったかのように言われるようになった。これに関しては、毛自身も1950年代には次のように語っている。

我々は教条主義に反対しなければならない。……レーニン亡き後、コミンテルンの指導は教条主義的だった（その指導者のスターリンやブハーリンらは、あまりよしくなかった）。……後になると、教条主義者たちはそれぞれの国の特色にかまわず、何でもロシアの通りにやろうとした。おかげで中国はだいぶひどい目に遭った。我々は整風というやり方で十数年にわたって教条主義を批判し、マルクス主義の精神に基づいて独立自主的に実際にことを行ってきた。そうしてようやく中国革命の勝利を手にしたのである。⁽³³⁾

整風運動でスターリンのやり方、あるいは教条主義を克服したればこそ、中国革命の勝利があるのだ、それをやったのはほかでもない自分だ、これがスターリン没後の毛沢東の認識、あるいは解釈である。後年、とりわけ人民共和国建国後の毛沢東について言えば、こうした解釈は成り立ちうるかも知れないが、整風時期の、少なくとも「12カ条」講話をした時の毛沢東にとってみれば、スターリンの著作は、「12カ条」にせよ、『小教程』にせよ、文字通り、すべて全党にとっての「バイブル」なのだった。

現に、西北局高幹会での講話の20日ほど前、毛は当時西北局の宣伝部部長だった賈拓夫にたいして、「12カ条」および『小教程』の結語部分を会議参加者の人数分だけ印刷しておくよう命じるだけでなく、その訳本も「最近師哲が訳出した版本」を使用するよう指定している⁽³⁴⁾。毛沢東が一回の講話のために、念入りな準備をしていたことはあきらかである。1938年に出版された『小教程』は当時の国際共産主義運動における必読文献であり、延安整風時期における最重要経典の一つでもあった。そもそも、同書がソ連でまだ編纂段階にあった時期から中共はその編纂、刊行に大きな関心を払い、折々に関係する報道を翻訳紹介していたのだった⁽³⁵⁾。

毛沢東自身もくりかえし同書を読み⁽³⁶⁾、それが「この百年来の全世界の共産主義運動の最高の総合・総括であり、理論と実際との結合の見本、それも全世界でこれしかない完全な手本である」⁽³⁷⁾とまで激賞している。実際、延安整風時期には、党史に関連する毛のほ

とんどの報告や文章で、『小教程』が言及されており、「12カ条」それ自身も例外ではない。むろん、後になると毛は同書に対する不満を漏らすようになる⁽³⁸⁾とはいえ、それはソ連でのスターリン批判によってその誤りを知るようになった後の話であって、1942年においてかれは疑いなくスターリンの支持者であった。つまりは、王明やいわゆる留ソ派ほど一辺倒でなかっただけで、毛沢東にせよ、王明にせよ、当時にあっては、スターリンを支持しない共産黨員などいるはずはなかったのである。この点については、2017年に逝去した何方氏が、次のように説明している。

延安整風については、かなり後になってから毛沢東が一再ならず、「整風とは実際にはソ連流の作風を是正するということであって、スターリンとコミンテルンの誤りを批判するものだった」と述べている。だが、これは党史でおなじみのあと知恵の言葉でしかなく、それを裏づけるような証拠にはお目にかかれない。こうした事後の説明とは正反対に、当時の延安整風とは主要にはソ連に学ぶもので、スターリンの『全連邦共産党歴史』を学習の中心教材とするだけでなく、当時完全に秘密裏に行われた西北局高幹会で、毛沢東が二日連続で講演したのも、スターリンの「党のポリシェヴィキ化について」の12カ条を解説するものだった。⁽³⁹⁾

毛沢東が「12カ条」講話で重要な理論的根拠とした『小教程』の最大の特徴は、党内路線闘争の意義を極端なまでに強調し、路線闘争を主線とする歴史叙述をあみだしたことである。『小教程』は本国ソ連ではスターリン批判の後、発行停止となったが、その後も中国では毛の生前は発行が続いた。いわば、ソ連が捨てた旗を中国が拾って掲げ続けた格好である。同書の功罪については、すでに1980年代に中国の多くの学者が見解を述べている。むろん評価に相違はあるものの、路線闘争を中心とする歴史叙述に対しては、その悪影響を指摘する声が圧倒的で、例えば、廖盖隆は1989年に次のような評価を下している。

〔『小教程』は〕多くの箇所でスターリンを持ち上げ、党内の路線闘争の意義やそうした路線闘争を敵対関係として処理しようとする「左」傾の誤った理論を極端なほど大げさに記している。これは毛沢東が晩年に路線闘争を拡大することに対して、直接かつ重大な影響を及ぼした。

この声は史学界に共通する評価だと言ってよかろう⁽⁴⁰⁾。まさにこの「12カ条」講話の前後に進行していた党内における歴史の見直しと総括、そしてその結果として1945年に採択

された「若干の歴史問題に関する決議」（全文約27,000字）には、「路線」の語が186回も使われており、「路線」はこの決議のキーワードそのものだった。それゆえ、延安整風運動とは、スターリンのイデオロギー・モデルを改めて導入しようとした試みだと見るができるのである。

3 「12カ条」講話と1945年「歴史決議」の内在的ロジックの関係

「12カ条」講話の特徴の一つは、『小教程』の思考方法にならい、西北革命運動の内部における紛糾、対立を「路線」の闘争の具体的事例と設定し、中共党史の重要問題点との相似関係を指摘したことにある。実際、毛沢東を中心とする中共の上層指導部は、この高幹会のために入念な準備活動を行っていた。実際で言えば、西北地域の革命の歩みで見られた左傾指導部の教条主義的な指導にたいして、毛は非常に細かい具体例を取り上げて、その現実離れした活動を批判している。例えば、スターリンの「12カ条」講話の第3条にある、「党が暗記した定式や歴史的類比によってスローガンや指令を作るのではなく、各国の革命の経験を必ず考慮しながら、革命運動の具体的諸条件（国内および国際）を綿密に分析した結果として、これを作る必要がある」という教えにたいして、毛は西北での革命運動における朱理治、郭洪濤らの教条主義的指導を反面教師とし、次のようにいうのである。

〔朱理治や郭洪濤らの教条主義的指導者たちは〕山奥にも労働組合を作れと言っていた。一体世界のどこでこんな文書や指示が見つかるだろう。（笑声）なんでそんな風になってしまうかと言えば、外国はこうだからなのさ。歴史のよく似た例をなぞって引用する。だから、昔ソ連でやっていたから、うちでもコルホーズ〔集団農場〕をやろうなんて書いてしまうわけだ。中心的都市を攻めるなんて北伐のころだったかに言って武漢を攻めたことがある。ソ連ではペテログラードを攻めたことがあるから、うちも中心都市を攻めるのだということだったが、その結果たるや、はたしてどうだ？

一見してわかるように、スターリンの「12カ条」を解説するさいに、毛は明らかに西北革命根拠地の歴史問題と広範囲に関連づけつつ、誰の目にも明らかになるよう問題点を提示していた。とりわけ「歴史決議」における王明らに対する「左傾」批判とピッタリと重なるのは、いわゆる「教条主義」にたいする次のような批判の口調である。すなわち、朱理治や郭洪濤らの誤りの性質に関して、毛は講話の中でかれら二人が「かつてはゆき過ぎの「左」傾の誤りだった。ところが、抗戦このかたのかれらの態度はどうだろう？……自

由主義だ。かつての「左」が一転右の態度になってしまったのだ」と述べているのである。「かつての左がのちに一転して右になる」というこの一句とその口ぶりこそ、少しでも中共の路線史をかじったことのある人なら、誰もが苦もなく類似例（土地革命時期の“左”傾日和見主義が一変して抗戦時期には右傾の投降主義者となってしまう）を挙げることができるであろう。そう、その後に毛が王明を批判するさいに常套句とした言い回しである。

中共の上層部において、かかる属性批判があからさまに広まっていくのは1941年9-10月、そして中央の指導者にある程度認知され、共通認識となっていくのは2年後の1943年9-10月の中共政治局会議以降ではないかと推測される⁽⁴¹⁾。そして、その共通認識となったものがさらにその2年後に「歴史決議」になったわけだから、「西北歴史問題」をめぐる毛沢東の郭、朱への厳しい追及は、やがて起こるであろう王明らの路線の誤りを批判するための、またとないリハーサルとなったはずである⁽⁴²⁾。その意味で言えば、西北局高幹会の朱と郭は、やがてなされるであろう王明批判のための試供品であったとさえいえるであろう。それを予告するかのように、毛はこう述べていた。

諸君らは今回西北の結論というものをこしらえたわけで、それは素晴らしいことだ。全党の結論も同様かどうか？ そう、同じ性質のことであって、あっちは全党の問題で、諸君らは西北版だ。こういった結論というものを出す必要はあるかどうか。むろんあるし、七大〔党の第七回大会〕では、それを出さなければならないのである。⁽⁴³⁾

ここで言う、「七大」で出さなければならない「結論」が1945年の歴史決議となることについては、もはや何の説明もいらないだろう。わかりやすい是非のモデルには反面材料（非）だけでなく、当然に正義派の役者も必要だが、西北歴史問題においては、正しい路線を実行した代表が劉志丹、高崗であった。それを宣布したのが、毛の「12カ条」に先だつて高崗が西北局を代表したおこなった「辺区の党の歴史問題の検討」にはかならない——「劉志丹同志は一貫して正しい路線を実行したのみならず、その人間としての資質もボリシェヴィキの典型であった」⁽⁴⁴⁾——ことは前述したとおりである。それを受けてなされた毛もその報告の評価を引き継ぎ、高崗と劉志丹には朱、郭と正反対の評価を下している。

郭洪濤や朱理治らは当時、陝北では指導者気取りだったが、民衆はかれらが指導者だなんて認めてはいなかった。かれらが認める指導者とは、高崗や劉志丹といった多くの同志たちのことだった。いったいどんなわけで民衆たちはかれらを認めたのか。つまりは、ん？ 高崗？ あばたの高、つまりはそこにいるそいつだ。（大笑）どうして

認めたのか？ 民衆にはハッキリわかっていたのさ、あっちこっちで遊撃戦をやって民衆を助けてくれる、民衆たち、庶民たちはちゃんとわかっていたのさ。

毛の講話は、これ以上ないほど明瞭な形と言葉で辺区の革命史上の路線の是非を総括したものであった。ただし、毛がスターリンに借りて編み出したこの路線の是非のモデルは、致命的な問題点を内包していた。「正しい路線」の執行者に一旦変動が生じると、関連する歴史評価の基準もそれに伴って変動してしまうという問題点である。すなわち、「辺区の党の歴史問題の検討」など西北局高幹会の下した裁定は、すべて、「劉志丹、高崗が過去にとった路線は正しいものだった」ということを大前提にしていたわけだが、それゆえに高崗の政治的立場に変動が生じると、西北歴史問題の評価や裁定のすべてが、それに連動する形で一転再転することを余儀なくされるのである。1949年の人民共和国成立後に生じたのは、果たしてそうした事態であり、毛沢東の講話が結局全文公表されずに終わったのもその故であった。

おわりに——「ボリシェヴィキ」ディスクールのその後——

毛の「ボリシェヴィキ化12カ条について」は、延安整風時期のかれの思想的発展をよく物語る優れて毛沢東らしい講話である。にもかかわらず、この講話が意外なほど知られていないのは、先に述べた技術的問題点（本書11-12頁）のほかに、二つの理由があると考えられる。一つはそれが路線の正邪を明確に示すという当初の目的を十分に達成していながら、あまりにも露骨に高崗を正しい路線の化身とし、他方でそれと対立した地方幹部に余りに露骨な、誹謗にも近いレッテルを貼るという仕打ちをしたため、高所に立って公平に評定を下すという色合いを失ってしまったことである。さらに高崗、劉志丹に過度に肩入れしたその正邪の図式は、後に高崗が失脚するに及んで、土台のもろさを露呈し、図式自体が破綻してしまったのだった。

そして今ひとつの理由は、その表題が示す「ボリシェヴィキ」ディスクール、すなわち文章が抜きがたく帯びているソ連由来の革命の価値観を高唱することが、延安整風の後期あたりから次第に忌避されるようになっていったという事情である。「ボリシェヴィキ」はロシア十月革命を成し遂げたレーニン以下の英雄たちであるが、1940年代前半あたり、あるいはコミンテルン解散の前後あたりから、中国ではモスクワ依存の教条主義の代名詞のように見なされるようになったということを想定してよいかも知れない。まさにイデオロギーのパラダイム転換である。

毛がスターリンに依拠してこの講話をした時には、認識の上ではおぼろげだったいわゆる教条主義への批判は、その後の延安整風の進行とともに強く意識されるようになる。その代表格としての王明や博古ら留ソ派指導者が「ボリシェヴィキ」を振りかざす教条主義者として取り上げられるようになっていったわけである。王明の代表的著作は『中共のさらなるボリシェヴィキ化のために闘おう』（為中共更加布爾塞維克化而奮闘、1932年に『兩条路線』を改題して再刊）であったし、かれら留ソ派のセクト主義を露骨に示すレットテルは「28人（半）のボリシェヴィキ」派であった。

「28人のボリシェヴィキ」について言うならば、この呼称は留ソ派が自らそう名乗ったのではなく、トロツキスト留学生あたりがモスクワ留学生の主流派にたいして付けたレットテルで、その28人の顔ぶれも一定せず、いわば実体なき架空のセクトだったらしい。ところが、延安整風運動が留ソ派幹部を標的とするようになるにつれ、1943年ごろになると「28人（半）のボリシェヴィキ」派なるセクトが作られ、党中央の篡奪を図ったという指弾とその人定が始まるようになる⁽⁴⁵⁾。このような中で、大上段に「ボリシェヴィキ化」を掲げて行われた講話を顕彰していくことは、中国の共産主義運動にとって、いうなれば扱いに困る勲章をどう飾るか、どう隠すかという厄介な問題になっていったのだった。

実は、毛自身もボリシェヴィキ化のために行われたこの講話の冒頭で、その語のはらむ危うさについて、つとにこう述べて警鐘を鳴らしていた。

今日、我々共産党の同志が互いに礼を交わすさい、ボリシェヴィキの敬礼を送る、略して「ボリ礼」〔布礼〕を送る！ などと言ったりする。つまりは何となく、きみもボクもボリシェヴィキだよと確認しているようなものだ。手紙を書くときもボリシェヴィキの挨拶を送ると書いてあつたりすると、こっちもボリシェヴィキの挨拶を送ると返すわけだが、こんな風に使い回されるボリシェヴィキの挨拶なんて、虚礼じゃないだろうか？⁽⁴⁶⁾

社交辞令の如くに幅をきかす「ボリシェヴィキ」という言葉に対して、スターリンの言うように、口先だけの看板にならぬよう「ボリシェヴィキ」の中身を追求せよ、という含意ももちろん毛のこの一節には込められているだろうが、同時にまた毛が「ボリシェヴィキ」という言葉に、ある種の欺瞞と白々しさを感じていたことが透けて見えてくる。前述した『小教程』への尊崇にうかがわれるようなスターリンのイデオロギー・モデルに対する全面的と言ってもよいほどの帰依と同様に、その帰依がボリシェヴィキの本場たる旧ロシアへの政治的、イデオロギー的、言語的屈従に容易に転換してしまいかねないことへの

警戒感、それがこの言葉を安易に使うことを戒めているわけである。そうした傾向は、延安の整風のターゲットがこれ以降、急激に王明時代に集中するのに伴って、関連する専門用語の改変が連鎖的におこなわれたことからあきらかだろう。

そしてそれは1953年に歴史決議が『毛選』に収録されるに至って、「ソヴィエト運動」が「紅軍運動」に、「蘇区（蘇維埃区）」が「根拠地」に、「暴動」が「起義」にと、それぞれ書き換えられることと並行してさらに進んだと言えるかも知れない。スターリンの金言に依拠することで世界を把握するのか、その金言を安易に引用する者を批判して中国革命の地平を見いだすのか、この講話が映し出すのは、その両者の間で揺れ動きつつ自らの革命の実践を語ろうと努力する毛沢東の軌跡である。

毛の「12カ条」講話からほぼ2カ月後、年も改まった1943年1月14日、西北局高幹会はようやく閉幕の日を迎え、高崗が改めて総括的な報告をした。その報告は、郭洪濤の土地革命時期における「左傾日和見主義」の誤りに再度批判を加えただけでなく、抗日戦争時期の郭の「投降主義の傾向」（すなわち、国民党との合作継続を念頭においた妥協のみを重視して、大衆の発動を後回しにすること）を強く指弾するものだった。「かれがばらまき実行した思想は、まさに新陳独秀主義の思想であり、それは突き詰めていけば、張国燾の要求とさほど違わないものにもなる」⁽⁴⁷⁾ という具合である。ここで興味深いのは、高崗もまた土地革命時期の左傾日和見主義者が一転して抗戦時期には右傾投降主義者になったと指摘している点である。これこそ先に見たように、「12カ条」講話で毛が披露した例の路線逸脱のパターンモデルである。ここからも、我々は西北歴史問題の総括と「ポリシェヴィキ化12カ条について」、そして1945年の「歴史決議」とが内在的ロジックの面で、ひとつながりのものであることを見てとることができよう。まさに、西北局高幹会における西北歴史問題の検討と毛の講話は、「歴史決議」の予行版にほかならなかったのである。

註

- (1) 「如何研究中共党史（1942年3月30日）」、中共中央文献研究室編『毛沢東文集』第2巻、人民出版社、1993年、399頁。
- (2) 人民共和国期における中共党史の編纂、なかんずく第二の歴史決議の制定を当時の中国政治の潮流と併せて検討した研究に、八塚正晃「中国共産党の『歴史決議』をめぐる政治過程（1979-1981）」（『法学政治学論究：法律・政治・社会』93号、2012年）がある。また、最初の二つの決議に関わった関係者の回想や資料を収録した公式の党の書籍として、本書編写組編『以史為鑑 可知興替——学習与研究中国共産党兩個《歴史決議》』（社会科学文献出版社、2012年）がある。
- (3) 歴史決議に関する研究動向については、梁暁「近年来《關於若干歷史問題的決議》的研

- 究綜述』（『伝承』2015年第5期）、黄俏晴「近20年来学术界对党的第一个《历史决议》的研究」（『中共南京市委党校学报』2023年第3期）といったレビュー論文があり、資料集としては胡喬木『胡喬木回憶毛沢東（増訂本）』（人民出版社、2003年）、前掲本書編写組編『以史為鑑 可知興替——學習与研究中国共产党两个《历史决议》』がある。
- (4) 拙稿「1949年を跨ぐ中国共产党史上の歴史認識問題——いわゆる「西北歴史論争問題」を事例として」（『近きに在りて』第53号、2008年）。「西北歴史問題」自体のあらましについては、以下の研究を参照のこと。拙稿「小説『劉志丹』事件の歴史的背景」（石川禎浩編『中国社会主义文化の研究』京都大学人文科学研究所、2010年）、王晓中「中顧委主持解决“西北問題”」（『炎黄春秋』2011年8月号）、李東朗「“西北歴史問題”的由来」（『党史博覽』2014年第9期）、魏德平「“陝北肅反” 争論始末研究」（『中共歴史与理論研究』2016年第2輯）。
- (5) 党の歴史文献にあって、すでに『毛沢東選集』に収録された文献は、その文言を尊重し、そのまま用いるという硬直した方針は、言うまでもなく、資料の混乱をもたらす。例えば、中国共产党紅軍第四軍第九回代表大会（いわゆる古田會議）で採択された決議は、第一部のみが「党内の誤った思想を是正することについて」というタイトルを付されて『毛選』第1巻に収録された。のち『毛沢東文集』第1巻はこの決議の全文を中央档案馆所蔵の文献に拠って公開したが、第一部のみは『選集』既取（毛自身が校訂済）を理由に、『選集』版を援用している（出典説明は“本篇第一部分根拠人民出版社1991年出版的『毛沢東選集』（第二版）刊印；其他部分根拠中央档案馆保存的1930年4月6日鉛印本刊印”）。つまり、毛が後年修訂したテキストと当時のテキストが混在する文書になっているのである。さらにその後出版された公式の党史資料集『建党以来重要文献選編』（中共中央文献研究室・中央档案馆編、中央文献出版社、2011年）もこの決議を収録する（第6冊）が、出典については「『毛沢東文集』第1冊所収のものに依拠する」とのみ記されている。すなわち、公式の党史資料集ではこれが新旧のテキストをつなぎ合わせた、いわば現物の存在しないテキストだということが全くわからない記載になっているのである。なお、こうした中共党史資料の根本的問題点をいち早く指摘したのは、村田忠禧「毛沢東の文献研究についての回顧と課題」（『横浜国立大学教育人間科学部紀要』Ⅲ、7号、2005年）である。
- (6) 周兵「《關於若干歷史問題的決議》的版本研究」（『中共党史研究』2012年第3期）。
- (7) その主なものに、胡喬木『胡喬木回憶毛沢東（増訂本）』325頁。なお、この8月19日付の毛の書簡は、この胡喬木の回想にのみ見えるもので、『毛沢東年譜』をはじめとする中共指導者の公式年譜、および『建国以来毛沢東文稿』をはじめとする毛の各種著作集には、全く関連するものが見当たらない。
- (8) 前掲周兵「《關於若干歷史問題的決議》的版本研究」。
- (9) 周兵「政治的出版与出版的政治——基於《關於若干歷史問題的決議》11個版本的比較分析」（『毛沢東著作版本及其經典化問題』國際學術研討會提出論文、上海、2017年12月5日）。
- (10) 遵義會議についての研究動向紹介としては、王朝輝「十年来国内学术界關於遵義會議若干問題研究綜述」（『寧夏大学学报』2016年第1期）参照。もっとも近年は、中国内外で「歴史決議」の政治性についての見直し、再検討がなされ、合わせて史実に関する実証研究も進展してきたため、「遵義會議」自体については、毛沢東の指導権確立のメルクマールとして特筆大書する色合いは、かつてに比べれば、かなり薄れたとあってよい。すなわち、毛が遵義會議で得たものは軍事的な指導権の一部であって、それまでの党の政治路線が毛のそれに一挙に取って代わられたわけではないこと、あるいは遵義會議での方針転換は毛が一人で成

し遂げたことではなく、他の指導者の理解・同調の結果であることが指摘されるようになっているのである。近年、遵義会議の意義について、「毛沢東が全党にたいする指導を初歩的に確立した会議」という言い方をしたり、あるいはその会議を毛沢東の指導権確立の長い過程の一コマと位置づける、いわゆる「広義の遵義会議」論（唐双寧「従更広的意義和範疇認識遵義会議——關於“広義遵義会議”及其歴史意義的探討」『党的文献』2015年第1期）が提起されたりしているのはそのためである。なお、遵義会議をめぐる文献や当時の報告に改作や事後修正といった加工（ないしは改竄）のあとが見られることについては、拙稿「毛亡き後に神話を守る——遵義会議をめぐる文献学的考察」（石川禎浩編『毛沢東に関する人文科学的研究』京都大学人文科学研究所、2020年）を参照されたい。

- (11) 「中央政治局会議（1936年9月15-16日）での毛沢東の発言」（楊奎松『革命——2 毛沢東与莫斯科的恩恩怨怨』広西師範大学出版社、2012年、125頁）。
- (12) 「任弼時向共産国際執行委員会主席団所作的報告《中国的抗戰形勢及中共的工作和任務》（1938年5月8日）、中共中央党史研究室第一研究部訳『共産国際、聯共（布）与中国革命檔案資料叢書』（18）、中共党史出版社、2012年、第18文件、86頁）。
- (13) 「国際指示報告（1938年9月）」（『王稼祥選集』人民出版社、1989年、141頁）。
- (14) 「中央政治局会議（1940年12月4日）での毛沢東の発言」（中共中央文献研究室編『毛沢東年譜（修訂本）』中巻、中央文献出版社、2013年、237頁）。
- (15) 「中央政治局会議（1940年12月4日）での張聞天の発言」（高新民、張樹軍『延安整風実録』浙江人民出版社、2000年、62頁、および前掲楊奎松『革命——2 毛沢東与莫斯科的恩恩怨怨』126頁。附言すると、『張聞天年譜』（中共中央党史研究室張聞天選集伝記組編、張培森主編）の2000年版と2010年版（修訂本）は、ともにこの張聞天の会議での発言を収録していない）。
- (16) 当初、中共中央は1937年12月の中央政治局会議（中国では俗に「十二月会議」と称することがある）で、近く第7回党大会を開くことを決議し、準備委員会を発足させていたが、その後種々の理由により1945年にまでズルズルと延期されることになる。度重なる延期の事情や背景については、中共中央党史研究室第一研究部『中国共産党第七次全国代表大会研究』（上海人民出版社、2006年）の第一編「七大的醞釀和籌備」参照。
- (17) 中共中央文献研究室編『任弼時年譜』（中央文献出版社、2004年）406-407頁、前掲『胡喬木回憶毛沢東（増訂本）』174-175頁。
- (18) 『六大以来』など延安で編纂された文献集がはたした歴史的役割については、前掲『胡喬木回憶毛沢東（増訂本）』174-186頁のほか、以下の研究を参照のこと。趙朴「『六大以来』和『六大以前』両書簡介」（『党史研究』1981年第1期）、逢先知「關於党的文献編輯工作的幾個問題（下）」（『文献和研究』1987年第3期）、裴淑英「關於『六大以来』一書若干情況」（『党的文献』1989年第1期）、閔志綱「『六大以前』、『六大以来』与中共党史研究」（『党的文献』1990年第3期）。付言すると、『六大以来』は1952年に再版（1980年の復刻版——中共中央書記處編『六大以来——党内秘密文件』人民出版社、上下2冊——は基本的にこの再版をもとにしている）されたさい、内容にかなり手が加えられている。したがって、1980年の復刻版『六大以来』（現在、内外の図書館が所蔵しているのは、ほとんどがこれである）を用いて延安整風時期の中共指導者の認識を検討するには、かなり慎重でなければならない。ちなみに、『兩条路線』は『六大以来』と『六大以前』から重要文献を抜粋し、さらに『六大以来』の刊行後に発表された整風文献を加えて編纂、刊行された（1943年10月、2000部）も

- のである。『兩条路線』に収録された文献（132篇）については、『延安民主模式研究 資料選編』（西北大学出版社、2004年）に一覧表がある。『兩条路線』の形態、現存本については、栄敬本等『論延安の民主模式』（西北大学出版社、2004年、138-139頁）を見よ。
- (19) 「中央政治局での毛の発言（1943年9-10月）」（前掲『毛沢東年譜（修訂本）』中巻、469頁）。前掲逢先知「關於党的文献編輯工作的幾個問題（下）」によれば、ここで言及されている「党書」とは、『六大以来』の中でもその上巻を指すという。また、逢氏は『六大以来』下巻の政治的意義は、遙かに上巻に及ばないとも指摘している。
- (20) 毛沢東は後年、いわゆる「廬山会議（1959年）」の時期にも、次のように述べている。「洛甫（張聞天）と任弼時の武装解除は、『六大以来』『兩条路線』のおかげである。『兩条路線』が出るや、ただちに武装解除された」（李銳『廬山會議実録』増訂本、河南人民出版社、1995年、189頁）。
- (21) 章学新主編『任弼時伝（修訂本）』中央文献出版社、2000年、545頁。
- (22) 「任弼時の中央政治局会議での発言（1941年9月12日）」、前掲『任弼時伝（修訂本）』577頁。
- (23) 前掲『胡喬木回憶毛沢東（増訂本）』213頁。
- (24) 「第三次“左”傾路線の九篇の文章を駁す」は、前掲『胡喬木回憶毛沢東（増訂本）』（211-231頁）、前掲楊奎松『革命——2 毛沢東与莫斯科的恩恩怨怨』（153-164頁）などに一部が引用されている。この筋記の執筆時期について、楊奎松は執筆開始から最終的な校訂、修正までかなりの時間を要したはずだと分析し、完成を見たのは1943年であろうと述べている。
- (25) 前掲『胡喬木回憶毛沢東（増訂本）』213頁。
- (26) 原文（「ドイツ共産党の前途とボリシェヴィキ化とについて」）は『プラウダ』1925年2月3日に発表され、のち『スターリン全集』第7巻に収録〔日本語版：大月書店、1952年、47-53頁〕。
- (27) 于光遠『我的編年故事（1938-1945）』大象出版社、2005年、150-151頁。
- (28) 前掲『胡喬木回憶毛沢東（増訂本）』207頁。
- (29) 周知のように、中国国外で刊行された毛沢東の著作集の中で、高い水準を誇るものに、竹内実主編『毛沢東集』（同『毛沢東集補巻』）、およびスチュアート・R・シュラム（Stuart R. Schram）教授らを中心とする研究グループが翻訳した英文版文集 *Mao's Road to Power* があるが、残念ながら、国外のこれら二種の毛著作集のいずれにもこの文章は収録されていない。このほか、毛の著作を網羅的に集めた香港潤東出版社の『毛沢東全集』（張迪杰主編、全52巻、2013年）は、確かに第17巻に「12カ条」の講話を収めるが、この「12カ条」を含め、収録する文章の大半に出典情報が付されていない。そのために、この本から毛の著作を引く場合には、その来歴の確認を含め、慎重にならざるを得ないという欠陥を伴う。本稿で「ボリシェヴィキ化12カ条について」を紹介、引用するさいには、文革時期に造反組織が発行した謄写油印版の版本（毛沢東『布爾什維克化的十二条——西北高幹會議上的報告』全47頁、出版情報なし）を主に使用し、必要に応じて他の版本（『毛沢東思想万歳』系統の鉛印本、および『毛主席論党的歴史』〔内部資料、油印打字件、1972年1月、全116頁〕）と対照し、補正する。以下このテキストは注釈では単に「12カ条講話」と略記する。
- (30) 「12カ条」講話。
- (31) 「12カ条」講話。
- (32) 延安整風運動期の中共、および毛沢東に対する『小教程』やスターリニズムの影響につ

- いては、拙稿「コミンテルンから中国革命・中ソ対立へ」（松井康浩編『ロシア革命とソ連の世紀』第2巻（スターリニズムという文明）岩波書店、2017年）、谷川真一「陰謀論としての継続革命論、そして文化大革命」（前掲石川禎浩編『毛沢東に関する人文的研究』所収）参照。
- (33) 「新聞出版界の代表との談話（1957年3月）」、前掲『毛主席論党的歴史』112頁。
- (34) 「賈拓夫への返信（1942年11月2日）」（前掲『毛沢東年譜（修訂本）』中巻、410頁）。ちなみに師哲は当時、ソ連・コミンテルンとの連絡や往来のさいに通訳として活躍していた党員であり、ソ連留学経験も長かった。
- (35) 1937年になされた関連の報道としては、「論聯共党史課本」、「聯共党史研究提綱」、「怎樣研究聯共党史」（それぞれ『解放』第1巻第13期、第1巻第17期（1937年8月9日、9月25日）に掲載）がある。
- (36) 毛は次のように述べる。「『小教程』は素晴らしい本で、わたしはすでに十数回も読んでおり、各位にも何度も繰り返しお読みになるようお勧めする」（陳晋主編『毛沢東讀書筆記精講 1』広西人民出版社、2017年、171頁）。附言するならば、毛のこの段の話の出所は郭化若の回想である。
- (37) 「改造我們的學習（1941年5月19日）」、『毛沢東選集』第3巻、人民出版社、1991年、802-803頁。
- (38) 前掲陳晋主編『毛沢東讀書筆記精講 1』、172頁。
- (39) 何方『党史筆記：從遵義會議到延安整風』香港：利文出版社、2005年、298頁。
- (40) 「『聯共（布）党史簡明教程』對中共党史教學和研究的影響（座談會發言摘登）」『中共党史研究』1989年第1期。
- (41) 郭德宏「關於“王明右傾投降主義”概念的由來及毛沢東等人對它的批判」『党史研究資料』1990年第12期；前掲楊奎松『革命——2 毛沢東與莫斯科的恩恩怨怨』155-156頁。前掲『毛沢東年譜（修訂本）』中巻、469-470頁にも関連の記事がある。
- (42) 王明のいわゆる「左」傾路線に関して、「12カ条」講話は曖昧な「中間路線」という呼称で呼んでおり、王明を名指しでは批判していない。
- (43) 「12カ条」講話。
- (44) 高崗『辺区党的歴史問題検討』中共西北局、1943年6月、39-49頁。
- (45) 「28人（半）のポリシェヴィキ」については、その首魁と目された秦邦憲（博古）が1943年に残した供述書が興味深い事実を指摘している。すなわち、かれが「28人（半）のポリシェヴィキの問題を初めて目にしたのは、上海の『社会新聞』でだった」というのである（博古「我要說明的十個問題（1943年9月）」黎辛、朱鴻召主編『博古，39歲的輝煌與悲壯』学林出版社、2005年、160頁）。つまりは、中国共産党のセクトとして摘発の対象ともなった「28人（半）のポリシェヴィキ」なるセクトは、『社会新聞』という政界ゴシップ雑誌の観測記事に由来する幽霊組織だった可能性が高いのである。
- (46) 「12カ条」講話。
- (47) 『高崗同志在西北局高幹會上的結論（党内文件）』（中共西北局印發、1943年10月）12頁。なお、「新陳独秀主義」「張国燾の要求」は共に、中国の最大課題を統一戦線の維持、発展とする見地から、中共をはじめとする諸派の国民党への妥協、あるいは解党を要求するものと〔中共の立場から〕見なされたものであり、陳、張は共に中共を除名されたかつての大幹部である。